

特 116

705

吉野上人
 大仏借養
 忠信
 烏帽子折
 大瓶持
 七



始



47116
705



吉野天人 概説

外七卷ノ一

都の人々吉野山に赴き、今を盛りの櫻花を賞つ、山深く分け入り、美
しき女性一人言葉をかくるより不審に思ひ、如何なる人ぞと問へば、此邊の者な
るが春になれば斯くて山野に日を送るを常とすと言ふ。かゝる程に日は暮れか
かり、も女は歸らん様もなし。都の人々益々訝めば、眞は我は天人なり、御身
遠信心、たまは、古へ天子の歡覽に入れ奉り、天上の舞を見せ申さんとて姿
を隠し、夜に入りて天人再び現れ、舞ひ奏で、御代をことほぎ、雲に乗りて消え失
せけり。

此曲ハサラリト朗ラカニ謡フヲ宜シトス
小書 天人揃

後シテ	前シテ	ワキツレ	ワキ都ノ人	役別
天人	女	都ノ人二人 (又三人五人迄)		
脇能ノ節、面増 髪 髪帯 着附指洵 唐織着流 扇 排大口 縫入腰帯 天女扇 三番目ノ節ハ 縫洵腰巻 長絹ス、舞衣ニモ 其外右ニ同シ		着附無地髪斗目 素袍 小刀 扇	着附紋髪斗目 素袍 小刀 扇	装束
目番三 (能脇器)		曲柄	月三季	附
級 五		替古順	山野吉郡野吉岡和太	所

吉野天人

佐阿彌安清作

ワキ男
口手男二人
次才上
拍子合
ツヨク
早河
サハラリ
ミヤコ
ガタ
スマ
ナ
モト
ヤクシ
トシ
ハ
ニ
ヨ
シ
野
天
人
の
雲
路
と
知
る
べ
に
て
花
の
雲
路
と
知
る
べ
に
て
吉
野
の
奥
と
尋
ね
ん
引
れ
の
都
方
に
住
ひ
す
る
者
に
て
い
き
そ
も
わ
れ
妻
に
あ
り
た
る
か
ら
こ
の
花
と
い
え
は
り
の
中
に
も
千
本
の
梅
と
年
々
に
彫
め
の
花
の
い
ふ
本
の
梅
の
三
吉
野
の

種取し花と承り及び山崎若き
 人々とも伴あひけの度河州に下向
道行天上
 仕りの赤紙の表の珠に梅の花心
 珠に梅の花心色音に際むや深縁
元久
 糸捨りかけて春柳の露も乱る
元久
 春雨の夜降りけるか花色の朝じ
元久
 めりして氣を立つ。吉野の山に

閑心

早白

急きけり吉野の山は急きたけり
元久
 急き山移はこれのはや吉野の山に
元久
 急きその山後山嶺も尾よも花に
元久
 ての山々奥深く分け入らむやと思ひ
元久
 なうあうあれある人々の何事と
元久
 作せしぞ 急き山崎
 てふかひの三吉野の花と承り及び

シテ女

呼掛

始めて此の山に分け入りてふも
 せむやごしあま御筆あるがけの山
 中に入らせ終ふのらかなる人にて
 わたりゆそこれのあたりに
 住む者あるが。喜まづよに白と送り。
 さあから花とを友とて。山野に
 暮すぞありありヨソクけにげま花の

○小謠

花の友人。他生の縁といひあから
 われらも同じその心シテ可も山路の
 友あれや柏ま合見もせぬ人や花の友。
 見もせぬ人や花の友。知らも知ら
 ぬも花の蔭に合ひ宿りして諸
 人のらつつか馴れて花衣の袖あれ
 て木の本にまちよりいざや剛めん

げにや花のもとに。席らん事を忘
る。美景によりて。花心。別れ別れ
初めて眺めん。いざいざ。別れて眺
めん。いかに申す。ま事のゆかやう
に。夜路と忘れ花と。眺め。珍み事。
いよいよ不審にて。そのゆへ。げに御
不審の御理。今の行を。か色む。ま。

眞はわれの人なるか。花に引かれ
て。来りたり。今。香は。く。に。接。居し
て。信心を。した。珍み。あら。その。古
の。五。第。の。舞。小。忌。の。夜。の。羽。袖。を
返。し。月。の。夜。遊。を。と。せ。や。さ。ん。物。目。
と。に。侍。ち。珍。へ。と。夕。映。白。み。花。の
陰。夕。映。白。み。花。の。陰。月。の。夜。遊。

カキコト

ヨ

と待ち終へ少女の姿現して必ず
 らに來らんと。迦陵頻伽の聲
 ぐらり雲に踏みて失せにけり
 雲に踏みて失せにけり
 不思議や虚空に音楽聞え異香
 薫りて花降り。これ治まれる序
 代とわや
 云ひもあへぬ雲の上

早カル上
 拍子拾六
 切途難子

中ノ舞
 中ノ舞
 中ノ舞

中ノ舞序間

下リ羽
 又出端
 ヤラ

打邊

云ひもあへぬ雲の上。琵琶琴和
 琴笙篳篥。鉦鼓羯鼓や糸竹の
 聲澄み渡る。まきの天つ少女の
 羽袖ををり。花に戯れ舞ふとわや
 少女の幾夜君が付と。お女の幾夜君
 か付と。撫でし巖もつませぬやまの
 花の指に舞ひ遊び。花びあがり

〇 獨吟
 〇 仕舞

月上サヲリト朗カニ

ヤア

カ邊ヤア

中ノ舞

飛ヒびラ下クるダけニほスもス上ニあスまニ君ノのニ惠ニ治ス
 るニ國ノのニ天ツつニ凡ニ雲ノのニ通ヒ路ノ吹キ閉ツ
 るニ名ガ少ト女ノのニ姿ヲ留メるニ春ノのニ霞モ靡ク云ニ
 吉ノ野ノのニ吉ノ野ノのニ山ノ梅ノうラろウみスんニえニ
 けニ又ニ咲ク花ノのニ雲ノのニりニ又ニ咲ク花ノ
 のニ雲ノのニりニてニ行ク方ノもニ知ラずニぞニなりニ
 けニるニ。

大佛供養 概説

外七卷ノ二

慈七兵衛景清は平家没落後流浪の身となりしが、頼朝を討たんと志已み難く、
 南都大佛供養に頼朝の参詣あるべしと聞き、忍びて奈良に赴き、久しく逢はざりし
 母をおとつれて、それとなく暇を乞ひ、母の情の温きに、流石の武士も涙に暮れて立
 去り、春日の宮人に身を變へ、頼朝に近づかんこそせしが、淨衣の透間より洩れし武具の
 光に見顯はされ、寄り来りし者共を斬り拂ひ、名劍あざ丸の切先より迸り出づる村
 霧に身を隠し、後の日を期して遁れけり。

此曲前ハ静カニ後ハ確カリト強ク詠フベシ

役別	装束	附
ツレ母	面深井 髪 無色髪帯 着附指箱 無色唐織着流	李
前シテ平景清	着附段履斗目 掛素袍 白大口 腰帶 小刀 扇 笠着ル	九
子方源頼朝	風折烏帽子 着附厚板 單狩衣 白大口 腰帶 扇	月
ワキ頼朝ノ臣	梨子打烏帽子 白鉢巻 上下長直垂 込大口 小刀 太刀 扇	曲柄
ツレ 立衆 従者三人	梨子打烏帽子 白鉢巻 掛直垂 白大口 腰帶 小刀 扇	目番(二畧)目番五四
後シテ平景清	翁烏帽子 着附厚板 縷狩衣 側次(シモ) 白大口 腰帶 太刀 萩蓑持 後・白鉢巻	級 五
		所 前大和園茶良若山 後大和園茶良若山 寺大東良茶同ハ後

大佛供養

作者不詳

シテ景清 用カニ
次牙上
拍子ニ合

忘れは草の名に聞きて忘れは
草の名に聞きて。悪ぶやわか身
あるらん。忘れは平家の侍悪七
兵衛景清にてい。われけの問は
西國の方にはひりか。宿野の子細
あるはより。紙の程まかりより清水

大佛供養

に一七日糸糸籠サシ中ロウとして依キ又承シりゆへに
南部大佛ダイブツ供養キヤウの由ユ中ナカしい。其も
若草邊ワカクサヘンに母ハハと一人持イちりてゆ程ハジに
かやうのさうふし孝キ贖トクに紛マれ
向敷カウガシのため只今イマ南部ナンブへとあき
あむれやげに古コはざも栄サカえ
紅葉カキの。寿永スエニギハヤヒの秋アキのいいかかるるべ

思オモえぬ風カゼは誘サシわれててギギも別ワれよし
都ミヤコの空ソラ引ヒきかへ鄙シノの憂ウレき住ス居ミ
撃ツかぬ船フネのカひもああくららええの家イに
生ウれまりて云ク々クのカげ
頼タむらええのカげ頼タむらええの
はまきのああららてまだけの世の
御住ミ居ミ所トコロ我ワれも教シの杜ツ鹿カ鳴ナくまま日の

大佛共養

二

里に急ハヤまにけり春日の里に急ハヤま
 にけりハヤ急ハヤぎの程ハヤに南都ナンツ若草ワカクサ邊ヘに
 急ハヤまにけりハヤのあたりにて御行方ミユク
 と尋ねハヤたむハヤあじハヤゆハヤとハヤも
 神カミが子の景清ケイセイは此ココの程ハヤにつくは
 あるハヤやらハヤんハヤ南無ナンムやハヤ三世サンジの法ホウ佛ブツ神カミが
 子の景清ケイセイは一度イツド逢アはせて賜タマひ給タマへ

シテハ業ノ内ノヤシハハわが子の聲コエと
 聞キくハヤよハヤりハヤもハヤ。急ハヤえハヤずハヤ樞トボツにハヤ立ち出デ
 づ。景清ケイセイあるハヤかハヤし程ハヤへハヤはハヤ轉マぐ。
心持シ業ノ内ノヤシハハわがハヤらハヤんハヤ。景ケイがハヤ名ナをハヤば
 作ハヤせハヤられハヤまハヤいハヤはハヤてハヤゆハヤまハヤつハヤてハヤまたハヤへ
 後ハヤりハヤゆハヤいハヤさハヤそハヤけハヤのハヤ程ハヤめハヤらハヤづハヤくハヤなハヤゆハヤらハヤひ
 つハヤぞハヤとハヤしハヤゆハヤ西ハヤ玉ハヤのハヤ方ハヤにハヤゆハヤらハヤひハヤが。

宿願シユクダランの子細シサガあるにやうに。教ノボにやうに清
 水ミヅに糸イト籠カケやうしにみりよ。大佛ダイブツ供養クヤクの
 由承ユキヤウりゆ程ハジメにかやうのせうりふし
 考カウ躰タマに妨マダれ。御音ミコト位イのためタメに奉ホウり
 てゆツレにそひ嬉カレしくも奉ホウり終ハジひて
 候マタ。又マタ奉ホウり申マウすべき事コトのゆつツます
 申マウすべきかシテウケテ。是コトれは今イマめがマき候マタ
先ヨカケサラリ

かまナ行事コトにててもゆかサしシふげウす
 るにてゆツレサラリ。真マコトや入イの中ナカすスの頼ヨロ朝アサと
 ねらひ申マウすと聞キきキの及ヨびヒて候マタが
 真マコトにてゆかシテウケテ。是コトれノ思オモひもモよラぬニ候マタに
 て候マタさうウあハらウ。西海サイカイにてニ亡ナシびハ終ハジひ
 しイ一イチ門モンの御用ミヨウひヒにもモあハるベき
 かと先ヨカケ思オモへハぬラひマすスなリ申マウす
ツレサラリ

大佛住持書

四

とうろつぬさる事なれども。好日さも
 知らぬ老の身の果さるも。ん届け
 珍なり。風ミテカレ上ニ用カニに。雲クモも。海ウミも。母ハハの。教シラシ
 経キヤウの。行ユク供キヤウ中ニさす。して。おツレと思へ。ハ
 起シテきも。せす。寝ネも。せで。夜ヨ中ニと。明アカ
 一ヒトか。ね。げノの。身ミと。隠カす。か。ひノも。あサく。
 景キヤウ清セイが。心ココロの。うウちニ。母ハハも。長ナガと。思オモふ。百ヒャクせニ。
拍子合

上ササリト朗カニ 小謡

一ヒトの。船フネの。うウちニ。一ヒトの。船フネの。うウちニ。
 肩カと。比ヒべ。膝ヒザと。くクみミて。前マ狭ヒくスむ。
 月ツキの。景キヤウ清セイは。夜ヨより。も。は。度タク毎ヘに。
 あアくテ。適タまマ。一ヒト類ルイの。以下キタ部ブ。
 略リョクさサまマ。ごゴまマ。に。多タけケれレどド。あアとトり。
 楫カの。母ハハは。業ノせ。主シヤウ後ゴ隔カあアりシぬ。
 子コも。羨ニヤまマれレたタりリ。身ミの。麒麟キリンも。

老ぬれば學馬に劣るが如くあり。

三ツ内ミツノウチカハ入用カニ
むや夜の明けての程に御暇オノイマし

候ツツサマかまへて御身ミミとよくよく慎み

て重ねて参り給みべし
三ツ内ミツノウチカハ上ウヘ用カニ
げに有

難ナシき母の慈悲シイ御誂ミコトの末も我ワレも

一ヒトきチ栞ハシラの森の雨露ウツクシの栞ハシラの

森の雨露ウツクシの指ササも濡ヌす我ワレが袖スエと

志イサ所トコロりかねたる候ウケかあアハつツつツか

親オヤ心ココロ悲カナし母ハハの門カド送り景清キヨキヨも

あアとトとト返カエりて候ウケとトもモにニ別わかれ

けり候ウケとトもモにニ別わかれけり中入

立象上タチゾウジョウ一ヒト聲コエ世ヨに隠カクレれあアき大伽藍ダイカラン佛ブツの供養クヨウ

急イサぐグありアリそソもモそソもモこれコレはハ源家ゲンケの

官軍クワングン右ミダ大将テウサウ頼朝レンチウとトの我ワレが事コトあり

立衆 ^{サライ} 奈くも ^{ナクモ} けの御寺は ^{ミテラ} 聖武皇帝 ^{シヤクム}
 の御建立 ^{ミツタテ} 大佛 ^{オホツツミ} 殿にて ^{ノミヤ} おくま ^{オクマ} す
 又 ^{マタ} けの君の御威光 ^{ミケイカウ} 今 ^{イマ} けの御寺 ^{ミテラ}
 に ^ニ あ ^ア ひ ^ヒ に ^ニ あ ^ア 五 ^イ 大 ^{オホ} 伽藍 ^{カラン} の御供養 ^{ミツケウ}
 大 ^{オホ} 伽藍 ^{カラン} の御供養 ^{ミツケウ} 光 ^{ミツ} り ^リ 公 ^{キミ} や ^ヤ く
 春 ^{ハル} の日 ^ヒ の三笠 ^{ミカサ} の山 ^{ヤマ} に ^ニ 敷 ^{シキ} 高 ^{タカ} 寺 ^{テラ} 法 ^{ホウ}
 の声 ^{コエ} の様 ^{サマ} ぐ ^グ に ^ニ 供養 ^{ミツケウ} と ^ト あ ^ア す ^ス ぞ ^ゾ
 後 ^{ノチ} シテ景清 ^{キヨキヨ} 上 ^{ノリ} 確 ^{カク} カリ
 一 ^{ヒト} 声 ^{コエ}
 拍子 ^{ウチ} 三合 ^{サンカウ} ハス

有 ^ア り ^リ 難 ^{ガタ} き ^キ の供養 ^{ミツケウ} と ^ト あ ^ア す ^ス ぞ ^ゾ 有 ^ア り ^リ 難 ^{ガタ} き ^キ
 面 ^{オモ} 白 ^{シロ} や ^ヤ 奈 ^ナ 良 ^ラ の都 ^{ミヤコ} の時 ^{トキ} め ^メ き ^キ いて ^イ
 いろ ^{イロ} いろ ^{イロ} 飾 ^{カザリ} ぶ ^ブ 物 ^{モノ} 詣 ^{ヨミ} わ ^ワ れ ^レ の ^ノ それ ^{ソレ} に ^ニ ぬ ^ぬ
 引 ^ヒ き ^キ か ^カ 入 ^入 て ^テ 敵 ^{カタク} と ^ト 討 ^ウ た ^タ ん ^ン 謀 ^{マコト} と ^ト 思 ^{オモ} へ ^ヘ
 心 ^{ココロ} は ^ハ 已 ^イ が ^ガ 名 ^ナ の ^ノ 悪 ^{アク} 七 ^{シチ} 兵 ^{ヘイ} 衛 ^{エイ} 景 ^{キヨ} 清 ^{キヨ} と ^ト
 御 ^ミ 前 ^{マエ} にも ^{ニモ} それ ^{ソレ} と ^ト 人 ^{ヒト} や ^ヤ も ^モ 一 ^{ヒト} 白 ^{シラ} 張 ^{ハカ}
 淨 ^{シヤウ} 衣 ^イ に ^ニ 立 ^{タテ} 烏 ^ウ 帽 ^{ボウ} 子 ^シ げ ^ゲ ぬ ^ぬ わ ^わ れ ^れ あ ^あ が ^が ら

思ひござる。婆上ニカハに今は橘トの葉ハの時雨シメ
降りおく矢アが下シタに身ミと隠カクレすへま
使シあまの憂ウレまき身ミの果ハぞ哀アハレなる。
宮ミヤ人の上ニカハ婆ハを中暫シバし將カド衣モウけ地確カリまは
かりこそ翁ニこシテサラシび人ヒトあカとカあカそ
非ヒだヌトウコにも目上ニシツカラ塵チに交マシはニる宮ミヤ寺テの
供ケ養ヤウの場バに甲立タち元出デづ拜るワキ内 引ヒキ返マゼ
引ヒキ返マゼ

行者ナニあれば清シヨ前ゼン回マ逆ゲカくまカるそ
そて退シテま用カマニ休ユへカこれカスの春ハ日ガの序シ
奴ヤシあるがガけケまマの佛ブツの御ミ供ケ養ヤウ場バを
清シヨめメの役ヤク人ニなるカと行カクくニとカあ
珍メみらんワキカハ上ニサテリ 喜カス白ハク祭マツリにガあマらバこソそ。
これホトケの佛ブツの御ミ供ケ養ヤウ ありシテあカ彼ハの
隔ヘてガとカ聞クくニ時トキは佛ブツも神カミも同ドウ一イツ體タイ

大佛堂

その上より賤の事なるとは行とて
簡み給ふべきワキカハル上包むとすれど非
はるは君と守りの御威光

顯れけるが白張のワキカハル上脇より見

ゆる具足の人金物シテ光を放つ

お物のカウチ鞠つまりたる詞の末

名告れ名告れと責めけだト顯れ

たりし思ひつミヤカハさらぬやうにてあら

席りニ人影に隠れけりワキカハル上言語

道新の事。口今ミヤカハの老をいがある老

ぞとシテ存して仕へども平家の侍サマラヒ悪

七兵衛景清シチベにていエシ正しく神が君

をとシテ収らひやすとあエシトの程にケイ弱を固

の老にシテやしつけ討ちとせケイつやと

存ト依カハル上 手強ク確カリいかたやいかた警固の兵
 儘かに聞け。只今うらんえー志れ去
 を。ちや社ツルの取つて急ツルらせよとさ
 も高聲高シクに下ゲ知チすれば 畏地ニサシつて
 のとて。急ツルぬて用急ツルの急ツル固ツルの兵
 皆一同皆一トに急ツルら騒ツルぐ 具ツルの時景
 清ツル又急ツルら出ツルて思ツルふやうと急ツルら

○獨吟

退ツルきては弓ツル矢ツルの飛ツル辱ツルとなるべき
 あれば。今ツル一ツル方ツル刀ツルは打ツルち合ツルひて重
 おて時ツル常ツルと侍ツルつべしと。大音ツルあけ
 て呼ツルばはりけり。そもそもこれハ
 平家ツルの侍ツル悪ツル七ツル兵ツル隊ツル景清ツルと
 名告ツルりもあツルへずあツルざツル丸ツルと。名告ツルり
 もあツルへずあツルざツル丸ツルと。すツルるツルりツルとツル抜ツルまツル

拍子ツル三ツル合ツル
 同上ツル

持^トち^トま^トち^ト向^トひ^トひ^ト大^ト勢^トが^トに^トわ^トつ^トて^ト入^トれ^トべ^ト
^上え^ト入^トも^ト固^トめ^ト一^ト教^トを^ト固^トま^トれ^トも^ト四^ト方^トへ^ト
 ぞ^トつ^トと^トぞ^ト遁^トげ^トに^トける^ト中^トに^ト若^ト武^ト者^ト
 進^トみ^ト出^トで^トき^トり^ト氣^トつ^トて^トち^トや^トう^トと^ト
 切^トれ^トば^トひ^トら^トり^トと^ト飛^トん^トで^ト平^トも^トも^トた^ト
 よ^トり^ト忽^トち^ト勝^ト負^トと^トえ^トん^トせ^トに^トけ^トり^ト今^ト
 の^ト景^ト清^トく^トれ^トま^トで^トな^トり^トと^トす^トく^ト物^ト

念^トを^ト致^トし^トつ^ト。彼^トの^トあ^トら^トぬ^トを^ト。さ^ト
 か^トぎ^トせ^トば^ト勢^トが^ト立^トち^ト隠^トす^トや^ト春^ト日^ト山^ト花^ト
 み^トに^ト飛^トび^ト入^トり^ト落^トち^トけ^トる^トか^ト又^トこ^トそ^ト
 時^ト節^トを^ト待^トつ^トべ^トけ^トれ^トと^ト虚^ト空^トに^ト聲^ト
 して^ト失^トせ^トに^トけ^トり^ト

忠 信 概 説

外七卷ノ三

源義経は梶原景時の讒言に因り兄頼朝と不和になり、吉野山の僧徒を頼みて籠り居たりしが、衆徒の心變りて頼朝に與し、今宵は討手に向ふよと聞えしかば、一先づ吉野を開く事となり、家臣佐藤忠信に一人踏み留りて防矢仕れと命ず。忠信主命を奉じて一人留り、衆徒をさしぐに射殺し、矢竭きて自ら谷に飛下り、危き命を助りて主君の跡を追ひけり。

此曲凡テ強クサラリト謡フベシ

ツレ	義經	黒風折烏帽子 着附厚板 長絹 白大口 縫紋腰帶 扇持	季
ツレ	太刀持 (謡トシ)	着附無地厚斗目 素袍上下 扇 太刀持ツ	十
ワキ	伊勢三郎義盛	袷子打烏帽子 白鉢巻 上下長直垂 込大口 小刀 扇	月
シテ	佐藤忠信	侍烏帽子 着附厚板 白大口(紺ニモ) 掛直垂 縫紋腰帶 小刀 神扇 物着ニ 袴 赤上頭掛 太刀 弓矢持 白鉢巻	曲柄
ツレ	法師武者 (三人又ハ五人)	金入沙門帽子(沙門ニ着) 着附無地厚板 半切又ハ白大口ニモ 側次(着込) 水衣 縫紋腰帶 袴 太刀 但重ハ武者長刀持ツ	目番五
ツレ	立衆 討手二人	白鉢巻 着附厚板 白大口 側次 縫紋腰帶 太刀	目番二
			級 五
			誓吉順
			山野吉郡野吉國和太
			所

忠信

世阿弥元清作

早義盛内 用カニ

これの判官殿の所内には伊勢の三郎
 義盛にていさそても神が君判官殿の
 洪の吉野を斬入は度ゆ所に敵の
 詮議か何なり。今夜夜討すべし事
 一定のちうへ申し候向げの事よし
 上げばかきぬじゆ。改メテ

山田

義盛がしあつての 洪方(義経)の

長つての ワキ ウレテ 義経 サアリ ツレ 義経 サアリ 今(ナニ)のたぬに

りてあるぞ ワキ 両カニ確カリ 義経 カニツテ 今(ナニ)のたぬに

儀にあらす。當(タウ)の者ども(ハコ)は

今夜(コノヨ)討(ウチ)す(マ)事(コト)定(サ)の(ノ)候(ウケ)

の(ノ)事(コト)や(ハ)し(ス)よ(ク)ま(タ)た(メ)に

あ(ハ)り(テ)候(ウケ) 義経 カニツテ 義経 カニツテ 是(コノ)は(ハ)真(マコト)に(ハ)あ(ハ)る(カ)

ワキ 両カニ確カリ

口(ク)惜(オシ)や(ハ)わ(レ)ら(ク)ば(ク)の

難(ナシ)を(ハ)逃(ガ)れ(ハ)命(イノチ)を(ハ)重(オモ)ん(ス)る(コト)も(ハ)朝

敵(テキ)の(ハ)虚(キヨ)名(ナ)を(ハ)晴(ハ)ら(ス)ん(ス)の(ハ)為(メ)あり(ハ)そ(レ)

に(ハ)當(タウ)山(サン)の(ハ)衆(シユ)徒(ト)夜(ヨ)討(ウチ)す(マ)事(コト)を(ハ)告(ツ)げ(ハ)知

ら(ス)る(コト)條(エ)だ(レ)偏(ヒト)に(ハ)天(オシ)の(ハ)御(カ)加(カ)護(ゴ)あり(ハ)

と(ハ)か(ク)に(ハ)わ(レ)の(ハ)夜(ヨ)に(ハ)入(イ)り(ハ)け(ハ)の(ハ)前(マエ)を(ハ)

開(ヒ)く(ハ)べ(ハ)し。誰(タレ)が(ハ)一(ヒト)人(ニ)留(ト)ま(リ)の(ハ)隙(フセ)ぎ(ハ)矢(ヤ)を(ハ)射(チ)。

其の後命と命を承りて踏次にて追の
 付くべき者やある。義盛がからひの
 護長つて承りゆさうあづら。某と
 初め皆何國までも御供とこそあじ
 ゆべけれ。恐れあから難にてもる。出だ
 されて直に傳せ付けられよかしとあじゆ
 それこそわれらが思ふ可あれた。さらば
 義経ササリ

佐藤忠信とけ方へとかしゆシテウケテ
 ゆいかに此の世の内は忠信の後りゆか
 誰にて渡りゆぞ 君よりの御使に
 義盛がまうてゆ。さうば用の事
 ゆへ御事ありあれこの御事にてゆ
 長つてゆシテウケテ 忠信まうてゆワキ改メテ さらかに忠
 信當山の者どもひかすう。今夜
 義経ササリ

夜討す入ま事一定の極に申しおきて
かくにわれは夜に入り汝の前と開く
べ。女一人留まり防ぎ矢を射その後
命を命うして。函次にてわがて追つ
まひ入。出護長つて承りひさりあがら。
某の事は行國まぐても御供よ言し
具せられひひて。知人に傳せ付けられ

ひも一辭一申す者あらばその時
清意とて背きやすまじくひわ
女と頼むよは。かくの事あるまじ
くひ。清意とてらかて。背くべき。か
も一人撰まれやし。防矢はれよの
俄渡。弓矢取つての。面目あれ。さ
こそひと。さう。あがら。神が君と初め

なり。皆人々に御名残を借う。

カレ上ヨク心持シ

 不覚の候とお入て御前を立つ。皆

上月 困

 衣にぞ覚ゆる。かくての時刻移る。

拍子合

 とて。かくての時刻移る。かくての時刻移る。

拍子合

 と初めなり。門前を出て。同道より。

アハレ

 ひそかに思ひ出で。終へ。忠信暫し

アハレ

 の御供し。御暇申し。留れ。かまへて

命を全うして。御供に。来ら。

一上

 不忠なるべし。心得よ。涙を流さ。

確カ

 終へ。素し。忠信の。留る。心。

中

 便も。涙。ある。らん。便も。涙。ある。らん。

ツ立象上

 吉野。川。氷。の。ま。に。ま。に。

一上

 彼。亦。ち。寄。す。る。嵐。の。な。い。か。は。

拍子合

 坊中。へ。事。内。申。し。

シテ

 今。は。夜。交。

人靜まるに案内中さしあひかある
法師長者 者ぞ わりあく頼朝よりの作に
 随ひ。あまの老も判官殿の御途に
 ありたり。さうさう出てさそ給ふべ
シテ手強ク あらばかかやあくも我君に
 思ひからんさやまづ軍の試
カル上ニ にこの矢一筋受けて見よし

上月 高槽に走り上
拍子合 り中差取つておち番ひす引
 いて放つ矢に真先かけたる武者
 数多一矢にさうとさうべ目と撃
 一。肝と消して一度にわとぞほめ
 たりける。刀を抜き持ちて。刀を抜き
 持ちて。弓手の脇より。右手の脇へ交

字に切らそぞらんえーが空肢切つて。
櫓より後の谷にぞろろび落つ敵の
兵これとんで霧れや老ども首と取れ
こ一度よとつて霧りおち破り乱れ入り。
とあま叫んで震動すれば其の際
に忠信の其の際に忠信の兼取て用
意のふち刀おつとらひひそかに思ひ出

て霧次からたち分けつくりつた
ひりくそとあやむる者ありてあれの
いかたと呼はりあくれの地に伏し隠れ
周きと便に思はんとして逃す
まどとてきりのつて拂ふとんえ
しが真向破られて二つにあれづつく
兵大ち刀かごーおつち刀を受け流し

猪藤モロトがけて。切り放し通つて。今イマは
かうよハルカと。遠トホの谷と。蝶テフ鳥トリの如ごとくは
飛び翔トビり。蝶テフるルの如ごとくは。飛び翔トビつて。
都ミヤコをさうして。ぞ。急イサぎギける

烏帽子折 概説

外七卷ノ四

牛若、金賣吉次を頼りて奥へ志すべく都を出で、追手来る由を聞き、姿を變へんとて途次烏帽子屋に立寄り、源氏の烏帽子を誂へ、烏帽子屋の妻は鎌田正清の妹にて、今こそ平家の代なれども、やがては源氏の代をじて牛若の前途を祝しぬ。さて青墓の宿に著きけるに、大賊長範吉次の財を奪はんとて夜に乗り來り窺ふ。牛若即ち唯一人にて秘術を盡し、六十餘人の大賊ばらと斬り破り、長範をも討取り、芽出度奥を指して立ちけり。

此曲前へ少シ心持シテ誦ヘドモ後ハ手強ク大キク誦フベシ

役別	装束	末	附
ワキ 金賣吉次	着附段腰斗目 白大口 掛素袍 紋付腰帶 扇		
ワキツレ 同 吉六	着附無地腰斗目 素袍上下 小刀 扇		
子方 牛若丸	着附厚板 白大口 長絹 紋付腰帶 扇 袷色鉾巻 太刀		
前シテ 烏帽子屋ノ亭主	着附段腰斗目 素袍上下 小刀 扇	曲柄	九 季
ツレ 同 妻	面深井 髪 髪帶 着附相薄 唐織着流		
後シテ 熊坂長範	面熊坂 長範頭巾 金地鉾巻 着附厚板 法被 半切 紋付腰帶 櫛 太刀	目番五	五
ツレ 火ツリ外輩下人 数定ヨリナレ 何人ニテモ	白鉾巻 着附厚板 白大口 火ツリ一人側次 紋付腰帶 太刀	目番二	級

烏帽子物

宮増某作

早吉次
ツレ上
柏子ニ合

我も東の旅衣。来も東の旅衣日
もさるるさると急ぐらん。我れは

三條の吉次信子に。われらの程
救の財と集め。券はての吉次と伴な
ひ。只今東へ下らう。かた吉次は
どもと集め東へ下らう。するはての

妻細心得申しのやがて御立ちあら

うするにていふ 子方半若 なまうあうあれあ

旅人奥へ御より候御供申しの

ん ワキ 易き間の御事にていふも

御安とらん中せば師匠の手を離れ

給ひたる人とらんえ申して候程に

思ひもよらぬ事にていふ 子方 われに

父もあく母もあく師匠の勅當蒙

りたれ カレ上 候ひて候き終入

此の上の辞退申すに及ばずして

けの御笠をとまらすれば 子方 半若の

笠おつ取つて今日ぞ始めて憂き

旅に 下 粟田口松坂や四の宮河原

逢坂の關路の弱の跡に立ちたり

○小説

上野の山

らつゝか高人のま後となるぞ悲しき
 葉屋の床の古。葉屋の床の古。
 都の外に憂き住居。さこそはと
 今思ひ粟はの糸とうち過ぎて
 弱もさうと踏みあらし。勢田の
 長橋おちり後り。野路の文を落守
 山の下葉きし照る日の影もかたみく

に向ふ夕月夜鏡の宿に暮まてけり
 鏡の宿に暮まてけり。急ぎの程よ。
 鏡の宿に暮まてけり。此の處に御
 休みあらうするはての。只今の
 早おとよくよく聞きあつたわれらが
 身の上にてゆげのまにての適みま。
 急ぎの髪を切り烏帽子と急東男に

身をわづらして。下らばやと思ひの候。
先ヲカハ
 いかたけの肉入事。あやしむ。報にて
子カサナリ
 後のふぞ。鳥帽子の前。整へし。事り
シテ
 て作。何と鳥帽子の法。前室と
ヤナタ
 ばや。夜中の事にて。お預に。明日お預り
子カサナリ
 て。集らせし。ずるにて。ふ。急ぎの
 旅にて。お預に。今。お折りて。給。お入

シテ
 さらば。お預りて。集らせし。ずるにて。おまう
先ヲカハ
 け方。御入りの。ふ。さ。て。鳥帽子の。何。事
子カサナリ
 にお。お。ま。ま。の。左。折。に。お。り。て
メマ
 賜。り。て。入。り。これ。の。作。に。て。お。ま。も。それ。の
シテ
 は。源。家。の。時。に。て。そ。今。の。年。家。一。統
 の。妻。に。て。お。預。に。左。お。の。思。ひ。も。さ。ら。ぬ
子カサナリ
 事。に。て。お。作。の。む。に。て。お。入。り。も。思。ひ

鳥帽子

子細のゆる。只おとりて賜つるへシテ確カリ幼き
 人の御事にては猶ほおとりてまら
 せりするにては。汝の左折の鳥帽子に
 ついて。嘉例めでたき物格の依格カタ
 つて聞せやするにては子方サテリおさらへ
 御物語りゆへオシテ語確カリおさらも某が先祖にて
 のおのりもよはし條鳥丸にゆひしよあ。

強クニいでその頃ハ幡太高ヤシ親家。安倍の
 貞任サダニ宗任ムネニと依退母ヨシノボあつて。猶ほ
 都に市上イチノカミ落オチあり。某が先祖にては
 去にげの左折の鳥帽子をおらせ
 られ。君に市出イチノデはありし時。帝は
 のめに思しめし。其の時の清キヨ悉シツ
 賞シヤウに奥陸奥の國と賜つてはミレヲカヘわれ

らも又そのめく。嘉例めでたまき鳥
 帽子おほてゆへハ。此の鳥帽子とる
 されて移あく清代又出羽の國の
 守カ。陸奥の國の守にかあらせ給
 かん法果報あつて。母に出で給かん時
 祝言申し鳥帽子おとるされて
 めでなう引出物賜むせ給へや。あわれ

行事も昔ありけり御鳥帽子の
 左折のその盛源平友家の繁昌
 花あらハ梅と桜木四季あらハ春
 秋月雪の眺めつれごと幸ひにや
 かつのまに保元の其の以後の平家
 一統の世となりぬるそ悲しきよし
 それこそも報いあらば。母憂あり時

○小謡

あり。折^ラ知^トる鳥^ラ帽子^甲梅^ニの^一花^一咲^中かん
 頃^トを^シ侍^サち^シ終^ル。カ^シヤ^ウん^シ脱^ヒつ^テ程^ニ
 あ^ク鳥^ラ帽子^一お^リ立^テ。花^ハヤ^カに^三
 色^ニ組^一の^一鳥^ラ帽子^一緒^ニあ^リ出^ダれ^ル氣^ト
 ぎ^ク結^ヒす^マし^ルさ^レて^ハ後^ハ又^ニ
 と^テお^ハ髪^ハの^上に^おち^置き^の立^ち退^き
 て^スれ^バ又^ハ暗^キ器^量や^とれ^ぞら

矢^ヤの^大將^トと^中す^きも^不足^ノも^あら^じ。

シテ^ハカ^ツテ
 日本^ニ一^鳥帽子^一が^似合^ヒナ^シて^ハ

子^カサ^ラリ
 さら^ば此^の刀^と兼^らせ^らず^るに^てハ

シテ^ハ明^カニ
 さら^ばや^鳥帽子^一の^代り^の定^まり^て

け^程に^思ひ^もよ^らず^候 ^子カ^サラ^リ ^たら^ず序

あり^の人^ハ ^シテ^ハ明^カニ
 さら^ば賜^わら^うす^るに^てハ

さ^こそ^妻に^てハ^者の^情ひ^のん^いか^た

わたり候かツレ女サカリ何事にてゆぞシテサカリ幼き
 人の鳥帽子のは前室と仰せの程に
 おりてまらせてゆづの力を賜り
 て候確カリあんほう見事ある候カハにて
 あまきカウテ心持シあはれよくゆづのあら不思議
 やかもうの事とて天の樂ある事
 とも思ひ給うぞさあごめと落候ルキの

何事にてゆぞツレカ丸上ヤラリ私サカりやスレんハと
 すれサ言ハのサ茶ハよりカまハづハさハまハだハつハの甲
三又フ今ハのサ行ハをカ色ハむハまハいハどハれハの
 聖ハなるハ内ハ海ハにて果ハて給ハひハ鎌ハ田ハ兵ハ
 衛ハ正ハ清ハのハ妹ハよりハ常ハ盤ハ腹ハにハのハ三ハ
 男ハ半ハ若ハ子ハ生ハれハさせ給ハひハ時ハ頭ハの
 殿ハよりハこのハ御ハ腰ハのハ物ハとハ御ハ守ハ刀ハに

きて集らさせ終ひし。其の御使と
 わらぬやしてさふらみあり。痛^チクわ
 世が安にてましまさば。かく憂^{ウレ}き目
 をごんまき物とあらあさましや
 何と鎌田兵衛正清の妹と仰せしか
 言^{コト}猪道^{イノミチ}あけの年月^{トシキ}係
 ひまらすれども。今あらうて。承^{ウケ}り

すゆ。さそく^カの御腰^{ウシ}の物^{モノ}と志^シかんと
 知りやされてゆか。司^ツねん^サたうと
 中^{ナカ}す御腰^{ウシ}の物^{モノ}にてゆ。げに^シげみ
 承^{ウケ}り及びたる御腰^{ウシ}の物^{モノ}にてゆ。さそく^カ
 鞍馬^{クマ}の寺^テに^ニ宿^スる^ルい^ハひし。半^ナ若^{ワカ}殿^{テン}にて
 宿^スる^ルい^ハひ。さあ^ハら^ハば^ハ追^オつ^クま^シけ^ノ御腰^{ウシ}
 の物^{モノ}と集^ツらせ^スる^ルい^ハひ。お^ハら^ハば^ハ追^オつ^クま^シけ^ノ御腰^{ウシ}
 の物^{モノ}と集^ツらせ^スる^ルい^ハひ。お^ハら^ハば^ハ追^オつ^クま^シけ^ノ御腰^{ウシ}

やまだこれには度ゆよこれに女の佐が。
 けの御腰の物を見知りたる由や
 しゆ程にさし上げられてなまのり
 不思議やおは方も知らぬ田舎人の
 われに情の深きぞや 人違へあら
 許しあれ鞍馬の少人牛若君
 とぞありてゆあり げに今思ひ

子方カレ上ニサナリ

子方サナリ

元カハ

出だしたるもし正清がゆかりの者が
 御目の程のかりこまよわらわ 藤田
 妹に ありやの前か 佐
 げに知るの理われこそか 身のある
 果ての牛若丸人かひもなき今の
 身と程れへ主候と。知らる事そ
 不思議ある 甲 口ニキ上 開カニ
 たりや東雲も明け

子方

ツレ

子方

ツレ

口上

子方

子方

甲

鳥羽

行けはるや東雲も明け行けむ
月も名珠の教うる鏡の宿を立ち
出づる痛みの御事やさも
名高き御身の商人と伴ひて
旅と飾磨の徒歩跣足もあて
られぬ御凡情 時代は変る習
とて妻のたぬ身とば捨て衣怨と

更に思へど 東路の道もあむけと
思ひめされぬとて 洲の御腰の物
と強ひて来らせ上げれば方おきて
受けとりわれもしも世にいつか
らば思ひ知らべしさらばきて商人
と伴ひ憂き旅にやつれをてたる
美濃の國赤坂の宿に美まきほけり

一、一、
赤坂の宿に暮きにけり

ワキツレサラリ
急ぎの程に赤坂の宿に暮きては

らかた言六紙の可に宿と取つて

ワキツレサラリ
畏つては

ワキツレサラリ
われらも是非と辨へず作面々の

ワキツレサラリ
何事と作せしぞ

可に海つふとびのあたるの悪黨

ども聞きのつけ。今夜夜討に討たり

する由かしは招へ。さやりの後合仕

子方強ク
りふ。たとひ大勢ありとも表に

たしん兵と。五十騎ばかり斬り伏す

ならば。中か退かぬ事かひま

ワキツレサラリ
これの頼もしき事と作せしものか

シツカイ
悪は白たのみ候
子方強ク
面々の武具して

侍ち終人カレ上ツラリわれの大平オホヘに向まべると
上月 手強クサラリ夕ユフも過ぎスて鞍馬山カマヤマ夕ユフも過ぎスて
拍子三合鞍馬山カマヤマ年月トシキ習ナひハ兵法ヘイホウの術シユと
 今イマその現アツキ一ヒト夜ヨの妻ウメとト閑クワンきて
 興キョウ津ツ白シラ浪ナミのおち入オチイると遅オソくと侍サマち
後レ立兼上 手強ク后キチたりおち入オチイると遅オソくと侍サマち后キチたり
拍子三合寄ヨせかけケておつ白浪シラナミの音ネ高くタカク

ツレカケテと閑クワンけたるの由ユの風カゼがハ早いハヤイか
ツレカケテせん候ウケ内の風カゼまマくクして或シの村ムラたれ
シテサレ用カメニ又マタの重手オモテ負オひヒたるトと申マウし候ウケ
シテサレ用カメニ不思議オモシロイやあ内ウチへの音ネ次ツギ兄弟ケイテイ弟テイあらラで
ヒラカハあアまマじジまマがガさサてテ何ナニ者モノかカあるアル

ツレサテリ
投げ松明の敷よりんんんへん年丁の
程十二三ばかりなる幼き者。お太刀に
て斬つてさうのゆゑさあから蝶鳥の
如くなるよしやし候 シテ確カリ 刃を摺針
太刀見事は ツレサテリ 刃の尖振りの親方
とて一番に斬つて入りしを例の
お男後り合ひ。兄弟の去のほそ

首と。たご ヒトウチ におちり落したる由
し候 シテ大キクカウテ 見え見え何と何と彼の者
兄弟は餘の去五十騎百騎に合ま
さずものせとあ カハル心持シ 斬つたり斬つた
り 一内確カリ 彼奴の曲者よ ツレサテリ 高瀬の四郎は
これをして今夜の夜討悪しかり
あんまり思ひけん テ 勢七十騎にて

退いて席りて作 シテ確カリ 彼奴は今に始
めぬ臆病者 モノ こそ松明の占手 タイ マツ ヲウラ デ いかん
ツレサリ 一の松明の斬つて落し。二の松明は
踏み消し。三は取つて投げ返して
ゆが二つが三つながら儲えて作
シテ幸々カシテ確カリ それこそ大事よ。それ松明の占手と
らあむ。一の松明の軍神。二の松明は

時の運。三のわれらが命あるに。三つが
三つあがら儲ゆる身ら。今夜の夜
討のさそよあ ツレカシテ 出度のおく。此のま
にての鬼神 スニニガミ にくもたまるま。く作。
た退いて御席りゆへ シテ げんげよ盗
も命のありてこそ シテ いざ退いて
らう ツレウキテ むいて シテ いかん シテ 長範

か。今夜の夜討と仕損じていつた
 面と向くべきぞ。なご攻め入れや若去
 せと大音上げて呼わりけり。関を
 作つて斬つて入りけり。あら物々
 ーや。已らよ。あら物々ーや。已らよ
 さまのまゝ並のちりらんぞ。れももろり
 ず。おち入ふ。か。八幡も。お見あれ一人

○獨吟

も助けてやら。ものごととお口は立
 て。そ侍ちかけたる。熊坂の長範
 六十三。熊坂の長範六十三。今宵最
 期の夜討せん。と。鉄殿と。ぬま
 捨て。五入三寸の太刀を。す。り
 抜いて。う。ち。か。た。げ。と。あ。み。に。ゆ。ら
 り。ゆ。ら。り。と。あ。み。出。で。た。る。有。様。の。い。か

なる又魔鬼非も面とむくべき極そ
 なま^上あらはかりや盗人よあら
 はかりや盗人よめだれ顔ある夜
 村のすももわれは適^カつものもそそ
 すきまあらせず斬つて魚^イの態^イ取も
 太刀^ホ遣^デひの曲者^クあれべさそくそつか
 つて十方^ツ斬^リ八方^ハ拂^ヒひや腰車^コ破^ク破^クの

大瓶狸々 概説

外七巻ノ五

唐土かね金山の麓に住める高風といへる者、市に出で日々酒を賣りけるが、親に
 孝あるによつて次第に富貴の身となりぬ。こゝにいづこよりとも知らず、毎日來り、
 酒を飲む者の盃の數は重れども面色の更に變らぬを怪しみ、其名を問へば、海
 底に住む狸々と答へて歸りけるを奇異に思ひ、一日又潯陽の江に出で、待つ處
 に、狸々其眷屬を伴ひ浮び出で、高風の徳をたへ、舞を舞ひ、盃を與へ蹠蹠
 として歸りけり。

此曲伸々ト晴レヤカニ謠フベシ

ツレ	後シテ	前シテ	ワキ	役別	装束	附	季	所
狸々四人	狸々	童子	高風		着附厚板 白大口 側次 腰帶 扇		九	唐土陽江
面狸々 赤地半被	面狸々 赤地半被	面慈童			黒頭 着附縫箔 水衣 腰帶 扇		月	
赤地半被 赤地縫紋腰帶 扇	赤地半被 赤地縫紋腰帶 扇						曲柄	
赤地半被 赤地縫紋腰帶 扇	赤地半被 赤地縫紋腰帶 扇						能切	
							級五	

大瓶狸々

作者不詳

早高風内サナリ

引れぬ唐土金重山の麓に。高鳳
 とやす民にてゆ。われ親よ孝ある
 によろ。次第改身み富貴の家と
 まかりなりて作又洪の向らづく
 とも知らず畜子ぬ多きあり。果か
 酒と買ひ取りのふ今も来りて

ゆづりあすある者ぞしなせと事ねだやと
思ひのほ シテ聲子トヤ 綿津見のそとも知らぬ
波間より現れ出づる日新かま

早月カウツテ 今白の市人の行とて遅くまり

珍まぞ シテヤサテ 焼くやこらぶと肉入り

いつもの酒と愛しけり 上あ月ヤリ 琴の詩

酒と聞くも隔てぬ友人の 神子合 聞くも

○小謡

欠

欠

し。て。さ。ら。ば。と。て。け。く。か。と。ん。れ。ば。
さ。よ。ぬ。り。の。面。も。赤。く。換。妻。り。て。
市。人。よ。ま。ち。ら。ま。き。れ。て。跡。も。ん。え。ず。
あ。り。に。け。り。跡。も。ん。え。ず。あ。り。に。け。り。
上。下。相。替。り。酒。と。聞。く。赤。酒。と。聞。く。名。も。す。
さ。ま。し。く。秋。の。来。て。暖。め。酒。と。菊。
月。の。頃。も。さ。や。紅。茶。の。だ。や。色。づ。く。

大宛屋

三

何れども、クル盡ツきせぬ象ゾウ。何れもナニ

戯ウケみれ。舞マシみし。かやカヤ 中々舞

菊キクの露ツキ。積ツりて、後シテ程々上盡ツきぬ。いつみノラズ

畫エきせぬ宿ヤドに、拍子合ハナ返マゼり。授ツけ置ツき○任舞

これまでなりや、日上醉サケひシテ中伏フスす。夢ユメの覺サトむ

こゝ思オモへば又マタ起オキきあがり。命イノチ長ナガ柄カサの

柄カサ枚ハシの酒サケと。道ミチ俗ゾク男オトコ女メに疎コトさず

○小搖

すめもその象ゾウにささまりければ

いづれもらづれも是コトもささりし

よろよろと。釋トクり言コトげく。子コ秋アキ方カタ

歳トシ君キミ千チ代ダイまでと。子コ秋アキ第ダイ歳トシ君キミ子コ代ダイ

までと。学マナブおゆる法ホウ代ダイこそめてたけね



著作權所
顧慙不許

大正九年八月廿五日印刷
同年八月三十日發行

訂正著作者 廿四世 觀世元滋

發行兼者 京都市上京區三條通麩屋町東北角 檜常之助

發行所 京都市神田區錦町二丁目拾番地 檜大瓜

京都市四谷區傳馬町貳丁目

印刷所 江川堂



大正九年

五月

終